授業改善推進プラン

武蔵野市立第三小学校

《６年　国語科》

児童の学習状態の様子･傾向	指導方法の課題分析	授業改善のための具体的方策
〇観点別分析 （１）「国語への関心・意欲・態度」 休み時間などの短い時間でも読書をする児童が多い。また、暗唱は家でも練習し、多くの児童が積極的に取り組んでいる。作文を苦手とする児童が多く、既習漢字を使用しなかったり、長い時間、書き出せなかったりする児童が数名いる。 （２）「話す･聞く能力」 話し好きな児童は多い。しかし改まった場では、とたんに声が小さくなり、話す順序の工夫や話すときに聞き取りやすくなる言葉を入れることができない児童が多い。聞くときには、大事なことを聞き逃さないように注意深く聞くことができる児童が多いが、長い話になると聞き逃しをしてしまうことがある。 （３）「書く能力」 作文や感想文、意見文と書いてきたが、事実を時系列で書くことは楽しみながらできている。しかし、自分の思いや考えを文章に表すことに抵抗を感じている児童が多く見られた。文章が書けないままや内容の薄い文章なども見られた。 （４）「読む能力」 主人公の心情の変容を正しく読み取ったり、叙述に即して自分の考えをもったりすることはできている。また説明文では要旨を捉えたり、構成を押さえたりすることもできている。 （５）「言語についての知識・理解・技能」 新出漢字に対しては積極的に練習するが、既習漢字を忘れてしまう児童が多い。また、正しく覚えていなかったり、小さく書いてしまったりする児童もいる。主述の関係や様子を詳しくする言葉など自信をもって答えられる児童は少ない。	**〇観点別に指導していること** （１）「国語への関心・意欲・態度」 読書や暗唱などの時間を確保しながら学習してきた。書く学習では、一文が長いため伝えたい内容がずれたり、既習漢字や主語と述語のねじれが生じたり、書く題材や事例、書き出しなどで悩んだりする児童がいるため、イメージマップや構造図などを活用してきた。 （２）「話す･聞く能力」 話すときに相手の様子を見ながら、分かりやすい言葉を選び、間や強弱をつけて話すように指導してきた。メモを持って話すことはできるようになっているが、話す言葉を文章に書いている児童もいる。聞くことについては、多くの情報を覚えることは難しく、メモの取り方を工夫するように指導した。 （３）「書く能力」 イメージマップを多用してきたが、書きたい中心や具体例などを分けながら書く事柄を見付けさせた。文末に「よかった」と表現する児童が多く、何がどうだったのかと視点を再度与えてきた。微妙な思いを伝える表現方法が多数あることを指導してきた。 （４）「読む能力」 物語文では心情の変容や叙述など、押さえるべきポイントを丁寧に指導してきた。説明文では、構成や要旨などの用語も含めて指導している。心情の変容などを押さえるためには文章を読むこととし、指示語や接続語なども押さえている。 （５）「言語についての知識・理解・技能」 漢字のはねるところや、書き順が乱雑になっているため、全体指導やノートの添削などで丁寧に指導している。漢字を覚えるための反復学習も適宜行っているが、定着が難しい。文作りの指導時間の確保があまりできなかった。	**〇観点別授業改善について** （１）「国語への関心・意欲・態度」 読み応えのある本やフィクションや伝記などへの興味関心を広げていく。多くの活字や情報に触れることで書く活動への抵抗を減らし、文章から伝わるよさを実感させるようにする。また、普段から書く活動前の題材集めを丁寧にさせ、短文作りを経験させることで主述の関係を正しく捉えさせるようにしていく。 （２）「話す･聞く能力」 討論会や話合い活動のときに、自分が話したことが相手に正しく伝わっているのか、相手が話したことを正しく聞き取ることができたのかについて、自己評価を行わせ、振り返りをする。その上で、上手にできていない児童へは個別指導を行う。 （３）「書く能力」 文章構成を考えて書くことは今後も指導していく。短文作りをしたり、文章の見直しを毎回させたり、表現の向上を意識させたりし、思いや考えを適切に表現できるよう指導していく。振り返りでは、苦手な児童は自己評価を常に低く付けてくると予想できるため、相互評価を取り入れ、客観的評価をし、次の課題を共に考えるようにする。 （４）「読む能力」 クラスの児童が同じ土俵に乗っている状態にし、児童の考えの違いから課題を挙げ、解決するために様々な手だてを講じていくようにする。また、振り返りをし、次の課題へとつなげていく。 （５）「言語についての知識・理解・技能」 字形が崩れ、漢字やひらがななど正しく書けない児童がいるため、硬筆や習字の学習を丁寧に行う。またスキルやプリントを用意し、繰り返し練習させる。文作りなどは、児童の興味をひくような題材の工夫をする。

授業改善推進プラン

武蔵野市立第三小学校

《６年　社会科》

児童の学習状態の様子・傾向	指導方法の課題分析	授業改善のための具体的方策
○観点別分析 （１）「社会的事象への関心・意欲・態度」 歴史上の人物についての本を読んだり、興味をもった人物について調べたりと、日本の歴史や歴史上重要な人物についての関心が高い児童が多い。授業では、教科書や資料集を使って、キーワードを抜き出したり、図や絵を使って調べたことをノートにまとめたりする姿も見られ、進んで学習に取り組むことができている。 （２）「社会的な思考・判断・表現」 歴史上の出来事について、時代背景や出来事の流れについて相関図などを用いて自分なりに考えたり、考えたことを伝えたりすることができる児童が多いが、自分の考えをもつことができない児童も数名みられる。 （３）「観察・資料活用の技能」 めあてに対して、教科書や資料集からキーワードを抜き出したり、必要な情報を取り出したりすることができる児童が多い。また、既習事項と関連付けて、出来事の要因などを自分なりに探り、工夫をしてまとめることができる児童もいる。 （４）「社会的事象についての知識・理解」 興味がある人物や、出来事について断片的に覚えている児童は多いが、流れとして歴史を理解し、順序立ててまとめることができる児童は少ない。また、時代をまたいで学習を進めていくと、忘れてしまう児童も多い。	○観点別の指導方法について （１）「関心・意欲・態度」 具体物を提示したり、映像資料を活用することで、児童の関心を高めたり、資料を見て、児童が疑問に思ったことをもとに、学習課題を設定させたりすることで、児童が主体的に学習に取り組むことができるようにしている。また、調べたりまとめたりしたことを発表することで、交流し合う場面を設定し、学習への意欲を高めるようにした。 （２）「社会的な思考・判断・表現」 資料を提示し、そこから児童が疑問に思ったことをもとに課題を設定し、資料をもとに自分なりの考えをもち、課題を解決していくという課題解決的な学習を行っている。しかし、課題解決に必要な資料を集めることはできるが、様々な資料を関連付けて考えをまとめることについては課題がある。 （３）「観察・資料活用の技能」 教科書の内容をなぞっていくのではなく、児童が必要な資料を集め、活用して、自分の言葉でまとめる学習活動を行っている。個人差が大きく、何をまとめてよいか分からず止まってしまう児童もいれば、時間が足りない児童もおり、個に対応した指導の工夫が必要である。 （４）「社会的事象についての知識・理解」 児童の発言や、ノートをもとに、学習内容を板書で整理したり、授業時間の終わりにデジタル教材を活用し、動画や写真などで学んだことを振り返ったりする学習活動を行っている。しかし、単元をまたいだ歴史の流れがとらえられておらず、違う単元の学習に入ったり、時間が経ったりすると忘れてしまう傾向がある。	○観点別の授業改善について （１）「関心・意欲・態度」 映像資料や写真などで視覚的に学習内容をとらえさせることで児童の関心を高めるとともに、学習内容を振り返る時間を確保し、自分が学んだことや次時の課題を書き出していくことで、児童が主体的に学習に向かえるようにする。また、挙手をしての発表だけでなく、小グループにおける話し合いなどを積極的に取り入れ、児童同士の学び合いを通して、互いの意欲を高めることができるようにする。 （２）「社会的な思考・判断・表現」 児童が設定した学習課題に対して、１つの出来事だけでなく、既習も含めた過去の事象を提示するなど、様々な資料を関連付けて考える活動の時間を確保し、考えを広げ深める。また、自分の考えと、友達の考えを比較し、自分の考えに取り入れていくといった振り返りの活動を行う。 （３）「観察・資料活用の技能」 学習課題を自力解決するために必要な資料を集めて、調べ、自分なりにまとめる活動を繰り返し行う。また、小グループに分かれ、１つの資料から考えられることを話し合い、まとめた結果をグループごとに発表する活動などを通して、資料を多面的に見取る力を身に付けさせる。 （４）「社会的事象についての知識・理解」 学習課題に対して、自分なりの言葉でまとめることを大切にし、学習内容の定着を図る。また、学んだことをまとめる新聞作りなどを通して、過去の学習内容を振り返ったり、過去の学習と関連付けて歴史の流れをつかんだりする活動を大切にする。

授業改善推進プラン

武蔵野市立第三小学校

《6年　算数科》　A集団：チャレンジ　B集団：ぐんぐん　C集団：ばっちり

児童の学習状態の様子･傾向	指導方法の課題分析	授業改善のための具体的方策
〇観点別分析 （1）「算数への関心・意欲・態度」 習熟度別に３つの集団に分かれて学習をしている。習熟の段階にあった学習が展開することにより、学習意欲を落とさずに学習に取り組むことができている児童が多い。A集団はめあてに対して、思考を促す場面を多く取り入れながら学習を進め、C 集団は基礎的な内容を重点的に押さえている。そのため全体的に意欲を継続して学習を進められている。 B集団の中では、習熟の差が大きく、学習内容によって、意欲を落としていくこともある。 （2）「数学的な考え方」 A集団では、めあてに対してまず見通しをもち、その解決に向けて、既習事項を生かして、自分の言葉で説明することができている。B集団では、全体で解決の見通しを確認すれば、自分の言葉で説明することができている。C集団では、教師とともに問題の内容をつかみ、どのように解決すればよいかを確認し、全体で問題に対して取り組んだ後、適応問題を解くといった形で授業を進め、自力解決をする力を付けている。 （3）「数量や図形についての技能」 基礎的・基本的な技能は身に付いている児童が多いが、習熟に時間がかかる集団は、定着にも時間がかかる。また、コンパスや三角定規を使って作図をする問題では、授業時間内では作図が終わらないなど、技能を発揮できずにつまずいてしまうこともある。 （4）「数量や図形についての知識・理解」 技能と同様、基礎的・基本的な知識・理解は身に付いている児童は多いが、習熟に時間がかかる集団では授業時間内に充分な定着がなされていない児童がいる。	**〇観点別に指導していること** （1）「算数への関心・意欲・態度」 どの集団においても、学び合いを通して、よりよい解決の仕方を考えたり、共有したりする活動を大切にしている。しかし、B集団においては習熟に差があるため、集団内での習熟の差に応じた柔軟な支援が必要であり、C集団では、どの児童も自分の考えをもつことができるよう、解決までの見通しを全体で確認した後に、個別に自力解決の流れを確認するなどの学習の流れを大切にしている。 （2）「数学的な考え方」 A集団では、既習事項を活用し、自分の言葉で説明させたり、１つの考え方だけでなく多面的に考えさせたりしている。B集団では、全体で見通しをもたせてから自力解決をさせている。C 集団では、全体で解決までの見通しをもたせた後に、個別での支援を行っている。このように、習熟度別に全体で見通しをもたせる場面を設定したり、教師の支援などを工夫したりして、数学的な考え方が身に付くように指導している。 （3）「数量や図形についての技能」 計算や作図などの技能がしっかりと身に付くよう、授業時間の中で適応問題を行ったり、補助教材を活用し、家庭学習で繰り返し問題に取り組ませたりしている。 （4）「数量や図形についての知識・理解」 文字や言葉のみで課題提示するのではなく、デジタル教科書を活用し、学習内容を視覚的にとらえることができるようにしている。また、その時間で自分が学んだことを振り返ったり、次時への自分の課題などを書き出したりする時間を確保している。	**〇観点別授業改善について** （1）「算数への関心・意欲・態度」 デジタル教科書などを活用し、問題を提示することにより、課題を視覚的にとらえさせ、児童の関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにする。また、具体物を活用したり、自らの生活経験の中から課題と類似した経験などを想起させたりすることにより、問題への興味・関心を高め、問題場面を正確にとらえることができるようにする。 （2）「数学的な考え方」 習熟の段階に合わせて、どの集団においても解決までの道筋を明確にしながら、自力解決ができるよう支援を行う。また、習熟により、易しい問題から始めたり、既習を振り返ったりする中で、自分の学習を振り返り、友達の考えの良さや自分の変容に気付くことができるよう指導する。 （3）「数量や図形についての技能」 繰り返し取り組むことで技能を定着させるため、授業時間内で適応問題に取り組むとともに、補助教材を家庭学習の課題として活用したり、朝学習の時間で活用したりして技能を定着させる。また、個別指導や、児童相互の教え合いをし、技能の習得を目指す。 （4）「数量や図形についての知識・理解」 授業のまとめでは、学習した内容を自分の言葉で振り返る時間をしっかりと確保して、理解を深めることができるようにする。また、本時で考えさせたいことや学び合わせたいことを事前に絞り込むことによって、児童が考えや理解を深めることができるようにする。

授業改善推進プラン

武蔵野市立第三小学校

《６年　理科》

児童の学習状態の様子・傾向	指導方法の課題分析	授業改善のための具体的方策
〇観点別分析 （１）「自然事象への関心・意欲・態度」 身近な自然事象について、疑問をもち、それを知る楽しさを感じながら取り組む児童が多い。宇宙やミクロの世界についても興味を広げ、知ろうとする児童が増えている。また、生物などの図鑑や説明文など、本を読み、知識を得ようとする児童もいるほど、理科に対する興味関心が高い。 （２）「科学的な思考・表現」 問題解決的な学習過程については、児童自身がその流れで物事を解決する思考が身についている。知識として知っていても、実際に体験していないことや今までに考えたことがないことなどは、根拠を明確にした仮説をもつことが難しく、実体験の希薄さが課題である。 （３）「観察・実験の技能」 実験器具の名称や扱い方については、授業展開の中で適宜取り扱ってきていることもあり、概ね正しく理解している。しかし、実際に扱うことがあまりない器具である気体検知管は扱い方やめもりの読み方など、忘れてしまいがちである。 （４）「自然事象についての知識・理解」 以前から知っていたことや学習して分かったこと、経験したことなどは、正しく理解している児童が多い。学んだことを実生活で確認したり、比較して考えたり、今学んだことと以前学んだこととを関連付けて推測したりすることに苦手意識が見られる。	**〇観点別の指導方法について** （１）「自然事象への関心・意欲・態度」 授業の導入時の問題提示は重要であり、児童が自分の問題として取り組めるように単元計画を立てている。意欲の高い児童が多いので、興味をかき立てるような映像や写真、事象の提示をするよう取り組むことができた。 （２）「科学的な思考・表現」 問題意識をもたせながら、自分の考えを深めていくような学習を今後も継続的に取り組んでいくことで、児童が不思議に思ったことを自己解決できるようにしたい。また、仮説や考察をする学習では、話し合うような活動を適宜取り入れ、根拠を示すようにさせてきた。 （３）「観察・実験の技能」 できるだけ実験器具に全員が触れられるように、支援員に多めに準備してもらえるようにしたり、誰もが器具の名称を言えるように繰り返し言わせたりしてきた。複数の器具を使用すると、名前が混同してしまい、使用方法さえも間違えることがあった。 （４）「自然事象についての知識・理解」 自然事象の疑問をそのままにせず、支援員に聞いたり図鑑で調べたりするように促し、児童から出てきた疑問に対して丁寧に受け答えするようにしてきた。比較し推論する経験がやや少ないため、指導の中で教師側から物事を関連付けたり、別の事象に置き換えて想像しやすくしたりするような思考の転換をさせ、知識に置き換えやすくした。	**〇観点別の授業改善について** （１）「自然事象への関心・意欲・態度」 児童の実態を丁寧に見取り、導入での問題提示をどうするかなど、学習計画の順序などの工夫をしていく。児童にとって身近なものを取り扱うように工夫し、実生活の中で児童自身が別の類似した自然事象に興味がもてるような配慮をする。 （２）「科学的な思考・表現」 根拠を明らかにしながら実験方法や考察をさせることで、科学的に物事を考える力を養わせる。既習事項の復習や生活経験を想起させるような場面をもつことで、考えやすくさせていくが、経験の差があるため、適宜ペアや小集団での話し合う場を設けていく。 （３）「観察・実験の技能」 実験方法が適切であるかを教師が把握し、児童が考えた方法で取り組ませる活動を今後も取り入れる。実験器具の取り扱いでは、教師の演示はもちろんのこと、支援員と共に机間指導を行い、適切に使用するよう助言する。振り返りの際には、実験器具の名称や使用法の確認を行い、すべての児童がそれらを正しく用いているのか、確認していく。 （４）「自然事象についての知識・理解」 実生活との関連を重視し、単元で学んだことが単発な理解にならないよう配慮する。実験器具の使用方法や実験の提示を適切に行うことで、児童の実感を伴った知識の習得へとつなげていく。授業や単元の終末には、振り返りを行い、進度の把握をすると共に、正しく理解しているかの確認を行い、個別指導を取り入れたり、次時に生かしたりする。